既存ストックの活用と交流を核としたまちづくり
～地域の自立は、住民のやる気と行政の後押し～

○ 島根県菱浦漁港の事例

【主な課 題】

・人(交流)、モノ(地域資源発掘)、金(外貨獲得)、情報(ネットワーク)等の拠点が未整備

⇒定期船離発着施設と併せた複合施設の整備を検討

（農林水産業と観光業を組み合わせた交流事業あるいは農漁村滞在型余暇活用を展開）

⇒旅客船の拠点化を図り、待合所機能を充実を図るなど利用者の利便性を高め、購買・飲食サポート機能との一体化

(交流人口の拡大、新たな就業機会の創出による地域の活性化)

【事業 ・取り 組み】

・漁港の既存ストックを活用し、地域の総合的な拠点として各種施設を併設した定期船離発着施設を整備

（定期船待合所、鮮魚直販所、地域食材の提供、インフォメーションセンターを併設した「キンニャモニャセンター」の整備）

・漁港漁村活性化対策事業（H12～H13）

（定期船待合室、インフォメーションセンター等の整備）

・新山村振興等農林漁業特別対策事業（H12～H13)

（特産品販売所、鮮魚直売所、農漁民朝市スペース、地域食材提供コーナー等の整備）

・単独事業（H12～H13）

（航路管理事務所、地域伝承交流室等の整備）

【事業効果】

○海士町人口（2,514人）の10倍を超える年間利用者数

本格的な施設利用が始まって以降、施設利用者数は増加

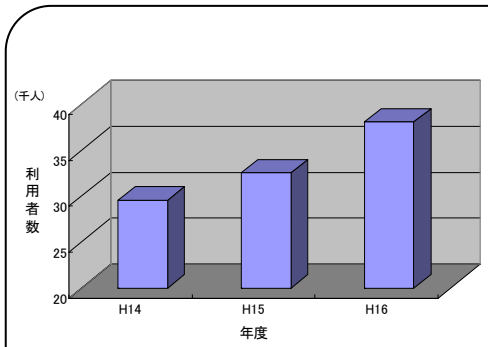
H14　2.95万人　→　H16　3.81万人

○農水産品、特産品、レストラン等の売上額の増加

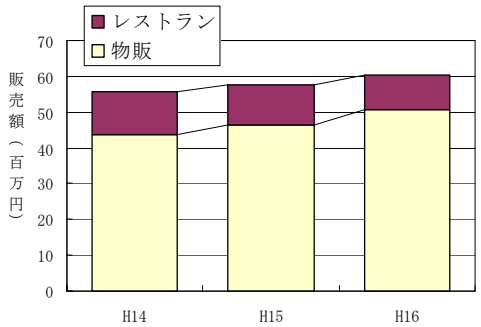
H14　56百万円　→　H16　60百万円

☆「キンニャモニャセンター」を中心とした地産地消の推進、地域活性化、水産業振興

定期船離発着施設（キンニャモニャセンター）



定期船離発着施設の利用状況



キンニャモニャセンター（物販、レストラン）売上額